

身近な事例で例証して

いく論説文を理解し、

レトリック感覚の意味を

考察する

——「コインは円形か」(新編国語絵

合 改訂版) を使って

奥園哲也

一 はじめに

高校生になって初めて出会う評論の教材としてこの作品を選んだ。文章読解が苦手だと考える生徒に対して、身近で興味・関心を引くレトリカルな例文が適切に引用されている本教材で、そのおもしろさを味わわせ、筆者の論理を追い、その主張を考察することから、論理的な思考力を身につける糸口にしたいと考えた。

二 教科書を開く前に

学習活動として教科書を読む前に、「各自ノートに百円玉の絵を描いてみなさい。」という指示を試みた。何の説明もしない状態で行わせたので、「なぜ国語の授業で絵を描かせるの?」という疑問を

持った生徒も多かったようであるが、とりあえず指示に従って描いていた。机間を回ってのぞいてみると、予想通りほとんどの生徒が円を描いて中に100と描いている。さらに三名ほど指名し、ノートに描いた絵を板書させてみた。二名は円の中に100、もう一名もほぼ同じだが、多少斜めから見た形で、側面のギザギザ部分を丁寧に描いていた。

その後、教科書の音読に入り、やっとその意図を理解したようである。

三 第一段落読解

「コインは円形である。……自然

「コインは長方形である。」…異様

同格であるはずの二つの文を比較して後者に違和感を感じるのは、我々人間の認識の一面性、有限性のためであると指摘する部分を理解させたい。実際、前述の絵においても三十数名全員がいわゆる円形の百円玉を描き、教科書のイラストにあるような完全な長方形(短い棒状)の絵を描いた者はいなかった。コインの例以外に同じ対象でも違う認識ができるものを考え発言させた。

「タイヤは円形・長方形である。」

「缶ジュースは長方形・円形である。」

円柱形以外のものでも考えさせた。

「ピラミッドは三角形・四角形である。」

「おにぎりは三角形・長方形である。」

日常生活の中で視点が定まってしまいがちな対象物を、別の視点からとらえさせる取り組みやすい発問で、思ったより積極的な姿勢で多くの発言があった。

四 第二段落以降

人間の認識は一面的なものであることと、それは言語表現に反映されることを認識し、人間などに対しても人によって見方が異なることを自覚させたい。「○○先生(担任)をどう思うか?」という問いに、優しい、おもしろい、かわいい、怖い、しつこい…などさまざま意見があった。これらを並べると、実際の人間像には多様な側面があることに生徒たちは気づいた。ここをもとに、筆者の言う「認識と言語表現の避けがたい一面性を自覚し、相手の立場や別の視点に立つてものを見ようとする努力」というレトリックの意義を考えさせ、「国際化社会」といわれる今日、人のできるだけよく理解するための術としてレトリック感覚の必要性を考えさせた。

おくぞの てつや 東京学館船橋高等学校

校(千葉県) 教諭。